

人の営みと神の時

伝道者の書3章

I. 人は時を支配できない

1. 古来、暦の作成は権力者の特権
2. 人は、時にあらがえない → 労苦してみたところで何になろう(9節。共同訳)
3. 希望の光 「神のなさることは、すべて時にかなって美しい」(11節)

He has made everything beautiful in its time. (NKJ)

(神は、すべてを、その時がくれば美しくなるように造られた)

＝たとえ今はそうでないように見えても。

「人の心に永遠を与えられた」(11節) 「永遠を思う思いを」(旧訳)

II. 現実的な幸福論

1. 「食べたり飲んだりして、すべての労苦の中に幸せを見出すこと」(13節)
2. 「人は神が行うみわざの初めから終わりまでを見極めることができない」(11節)
＝たとえ今はすべてがわからなくても (人生をあきらめてはいけない)

III. 神こそが主権者

1. 「神がなさることはすべて永遠に変わらない」(14節)
＝神がなさることは完全なので、改善、改良の余地はない。
2. 「追い求められてきたことを神はなおも求められる」(15節)
God requires an account of what is past. (KJV)
(神は過ぎ去ったことへの説明を求められる)
→ 「神は正しい人も悪しき者もさばく」(17節)
←「さばきの場に不正があり、正義の場に不正がある」(16節)
3. しかし、弱肉強食という点で、人間も動物(獣)も同じではないのか(19節)
「人間の例は上に昇り、動物の霊は地の下に降ると誰が言えよう」(21節。共同訳)
「死後どうなるのかを、誰が見せてくれよう」(22節。共同訳)

父・藤沢周平との暮し
遠藤展子



「ふつうが一番」

- I. 過去も未来も、私たちは支配できない。しかし「今」なら支配できる。
神は言われます。「恵みの時に、わたしはあなたに答え、救いの日に、あなたを助ける。」見よ、今は恵みの時、今は救いの日です。(Ⅱコリント6:2)
- II. 食べたり飲んだりすること自体が幸せではない。希望があつてこそ。
もし死者がよみがえらないのなら、「食べたり飲んだりしようではないか。どうせ、明日は死ぬのだから」ということになります。(Ⅰコリント15:32)
- III. 「人の子」としてキリストはさばかれてくださった。
キリストも一度、罪のために苦しみを受けられました。正しい方が正しくない者たちの身代わりになられたのです。それは、肉においては死に渡され、霊においては生かされて、あなたがたを神に導くためでした。(Ⅰペテロ3:18)